

「ローザンヌ大学ワルラス文庫」をめぐる

御崎加代子 Kayoko Misaki
滋賀大学 経済学部 / 教授

はじめに

2022年6月30日、滋賀大学経済経営研究所の先端研究セミナーで「レオン・ワルラスと『国富論』：ワルラスが実際にスミスから学んだことは何か?」という報告を行った。このセミナーには、本学の教員・大学院生だけでなく、オンラインにより学外の多くの方々にも参加していただいた。セミナーの内容は、2021年6月に、*The European Journal of the History of Economic Thought*誌に掲載された私の論文“Léon Walras and *The Wealth of Nations*: what did he really learn from Adam Smith?”に基づいている。同誌は経済学史の分野を代表する国際査読ジャーナルであるが、私の論文は、2022年11月現在、同誌の「最も読まれた論文(Most read articles)」(全期間)第6位にランクインしており、分野を超えて世界中の多くの方々を読んでいただいている。このエッセイでは、論文を完成する決め手となった「ローザンヌ大学ワルラス文庫」への私の取り組みについて、滋賀大学での成果の発表を振り返りつつ、紹介したい。

1. 1998年 ローザンヌ大学ワルラス文庫への最初の訪問

ワルラス(Léon Walras, 1834-1910)は、一般均衡理論の創設によって現代経済学の礎を築いたフランスの経済学者である。ワルラスが教鞭をとったスイスのローザンヌ大学(当時はローザンヌ・アカデミー)には、現在、経済学史研究の国際的な拠点として有名なワルラス＝パレート研究所がある。同研究所は、ワルラスの蔵書が保存された「ワルラス文庫」を管理している。私は、1998年10月に同研究所で開催されたシンポジウムで研究報告をした際に、初めてワルラス文庫を訪問することができた。ワルラスは読書の際、本に書き込みをする習慣があり、蔵書への書き込みを調べれば、思想の形成過程がわかるということ、当時、案内してくれたスタッフから教えてもらい、私は

非常に新鮮な驚きを覚えた。私がまず興味を持ったのは、ワルラスがリカード、J.S.ミル、サン＝シモン、マルクス、ジェヴォンズなどの著作をどのように読んだのかということである。この最初の訪問については、研究ノート「ローザンヌ大学ワルラス文庫について」『彦根論叢』第319号(1999年6月)で、詳しく説明している。

2. 2005年『ワルラス全集』第14巻の刊行

1998年当時、ワルラス文庫には完全な目録がなかった。しかしながら1987年から刊行が始まっていた『ワルラス経済学著作全集』の最終巻にあたる第14巻が2005年に公刊され、そこに同文庫の完全な目録が掲載された。この目録には、本のタイトルだけでなく、書き込みの有無まで示されている。ただしこの書き込みがワルラス自身の手によるものなのか、それとも他の者によるのかを特定することは困難で、断念せざるをえなかったことを、『ワルラス全集』の編者は指摘している。実は1998年に「ワルラス文庫」を訪問した際に驚いたのは、学生の自由な閲覧が許されていることであった。そのせいか残念なことに、ワルラスの生きていた時代には存在しないボールペンの書き込みもあった。現在、ワルラス文庫は一般には非公開で、私は調査の都度、研究所にお願いをして閲覧させてもらっている。貴重資料を保存する場合、どこまで利用者の便益を優先するのか、非常に難しい問題である。

3. 2015年『国富論』(1859年版)との偶然的出会い

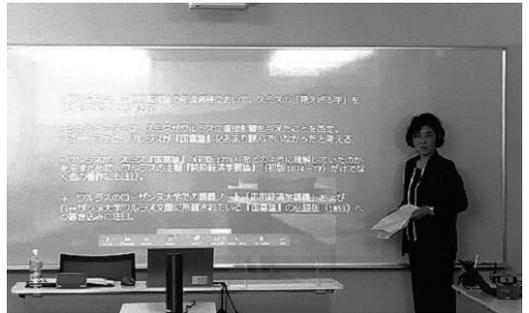
2005年の目録が公開された後、研究報告のためにローザンヌ大学に出張するたびに、ワルラス文庫を閲覧させてもらったが、時間の制約もあり、なかなか研究成果を得ることができなかった。しかしながら2015年3月、同文庫の調査のみを目的とする出張をする機会がめぐってきた。この時の私の目的は、ワルラスがマルクス『資本論』から受けた影響を探ることで

あったが、残念ながらその手掛かりはみつからなかった。この点については論文「ワルラスのマルクス批判－企業者国家論を中心に－」『滋賀大学経済学部研究年報』Vol. 22 (2015) で説明している。しかしながらこの時、私は偶然、ワルラスが所蔵していた伝語版『国富論』（1859）を手にし、そこに多くの書き込みがあることを発見し、驚愕した。実は1998年の訪問時にも『国富論』を確認していたのであるが、それは経済学者であった父親のオーギュスト・ワルラスが主に使っていた1822年版で、こちらにはまったく書き込みがなかった。1859年版の存在を知らなかった私は、ワルラスはスミスから影響を受けていないというシェンペーターの解釈通り、ワルラスは『国富論』には興味がなかったと思いこんでしまったのである。私は、ワルラス文庫の『国富論』の書き込みをすべてノートに書き写し、帰国した。

4. 「見えざる手」とワルラス一般均衡理論

この訪問がきっかけとなって、私はワルラス文庫の調査に本格的に取り組むことを決意した。そして2017年から3年間、科研費のプロジェクト「ワルラス一般均衡理論の思想的起源の解明－ローザンス大学ワルラス文庫を手掛かりに」に取り組むことになった。ワルラスの一般均衡理論は、スミスの「見えざる手」を理論的に発展させたものというのが、経済学の教科書に書かれている一般的な解釈であるが、私は、そのような常識に真っ向から挑むことにした。同時に、ワルラスはスミスから影響を受けていないというシェンペーターの解釈にも反論しようと考えた。

ワルラスと『国富論』との関係について、最初に論文発表をしたのは、2017年5月にアントワープ大学で開催されたヨーロッパ経済学史学会(ESHET)の年次大会である。この直後の6月15日に、報告論文の要旨を滋賀大学リスク研究センター（当時）のEnglish Lunch Seminar で発表した。この英語のセミナーに



2022年6月30日先端研究セミナーでの報告



ワルラスが教鞭をとった旧ローザンス・アカデミーの校舎

は、予想以上に多くの学生さんたちに参加していただいた。ワルラス文庫の話は、それまでにも私の授業「経済学史」「現代経済学史」などで、時々話題にすることがあった。この論文は経済学部¹の学生ならだれでも知っているトピックスを扱っている²ので、親しみがもてたのであろう。参加者の皆さんからの興味深いコメントや質問に、刺激を受けた。その後、私は論文をさらに発展させ、前述のジャーナルに投稿し、査読を経て掲載されることになったのである。

おわりに

その後もワルラス文庫の調査は続き、2018年3月の調査の成果は、研究ノート「ローザンヌ大学ワルラス文庫所蔵 ジェヴォンズ『経済学の理論』三つの版(1871, 1879, 1909)をめぐって」『彦根論叢』第418号(2018年冬号)で発表した。言うまでもないが、ワルラス文庫の書き込みをいかに多く発見したとしても、それだけでは学術論文にはならない。そこからいかに有意義な結論を導き出すかが私の取り組んできた課題である。2016年度4月から10か月間、大学のサバティカル休暇を取得して以来、毎年、研究論文を国際学会で発表し、国際査読ジャーナルに投稿してきた。その集大成として、英文での単著 *Léon Walras's Economic Thought : The General Equilibrium Theory in Historical Perspective* が、2024年にRoutledge社(London & New York)から公刊されることが³2022年に正式に決定し、現在その仕上げに全力投球している。

